

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	THE POWER OF MUSIC! みんなのコンサート in 東北				
開始日	2011年5月1日	終了日	2012年1月31日	日数	276日
団体名	特定非営利活動法人みんなのこぼ				

総額 (税込)	6,257,619円	スタッフ人数	20人 (非常勤スタッフ・音楽家含む)
---------	------------	--------	---------------------

事業目的	<ul style="list-style-type: none"> ■ 生演奏のコンサートで“聴く”“歌う”“演奏に参加する”ことを通して、音楽の持つ様々な効果により被災者の方をサポートし、長引く避難生活の中での感情の発散や未来への希望を持つなど、精神的活力を取り戻し、生活再建・復興への一助を担う。 ■ 事前に開催場所になる被災地コミュニティとの対話を重視し、コンサートのすめ方の相談や協力を依頼して、ともにコンサートをつくりあげることで、被災地の方々に一体感や達成感を供与する。 ■ 報告会コンサートについては、現地の状況を、音楽の活動を通して東京エリアに住む人々へ伝え、現地への理解と継続したサポート、および防災意識の啓発をする。
事業全体の概要	<p>【概要】</p> <p>2011年6月より、宮城県および岩手県の被災地域の学校（保育園、小学校等）または避難所等で、1回45分の生演奏によるミニコンサートを開催する。通常東京でプロとして活躍するフルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの4名の演奏者と司会が4泊5日で出向き、1つの町につき、1日3箇所前後で開催し、音楽を聴き、一緒に歌い、演奏する機会を提供する。また、東京でカスタネット等の楽器の寄付を募集し、それを使って参加者が一緒に演奏できるプログラムを含める。開催場所は避難所、子どもの教育機関（保育所を含む）を優先して選定する。また、可能な限りコーディネーターが事前に訪問し、被災地のボランティアセンターや災害対策本部ほか関係者と綿密に連絡をとって地域の特性や被災の経緯などを考慮しながら、プログラムを策定する。また、開催地の代表者・担当者（避難所であれば責任者、学校であれば校長など）と相談のうえ、周辺の地域住民へも配慮して、日時を設定し、コンサートの告知を行う。また、弊団体の普段の東京エリアでの幼稚園や保育園での活動に、現地での支援活動の報告を加える。また12月には、イベントとして都内のホールで現地での活動報告会を兼ねたコンサートを開催することで、東京エリアの子どもたち、子どものいる家庭に現状と復興状況への理解、継続したサポートおよび防災意識を啓発する。</p> <p>コンポーネント① 生演奏コンサートのお届け</p> <p>保育所、幼稚園、学校、避難所等へうかがってコンサートを開催。 基本スケジュールは1回4泊5日で、1日目と5日目は移動日、2～4日目は1日1つの町で3箇所前後でコンサートを開催する。</p> <p>コンポーネント② 東京近郊の活動における報告・啓発</p> <p>東京近郊に住む子どもたちは、3月11日に大きな揺れを体験し、テレビで津波の映</p>

像を見て、時々続く余震の中、日々過ごしている。しかし東北の出来事はテレビの中のことではないこと、同じ年代の子どもたちがどのような日々をおくっているかを知ることによってこれから長く続く復興に向けて当事者意識を持つことが大切である。そのため、NPO みんなのことばの普段の活動である東京エリアでの幼稚園・保育園の幼稚園・保育園のコンサートでの報告の他、イベントとして報告会コンサートを実施する。

2. 事業の評価（評価者：武蔵野大学教授 藤森和美）

最終評価実施日：2012年1月25日（水）

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングは

よかったか

【コンポーネント①】

- 被災後、5月という早い段階からも現地調査に入り、避難所などを訪問することで、被災者のニーズをキャッチし、事業を展開できている。生活が落ち着かず心理的にも不安定であるからこそ、生演奏の音楽を被災者に聴いてもらうという活動の初動は早く、現地のニーズに合っていたと評価できる。
- 10月は、仮設住宅のコミュニティーセンターで実施し、孤立しがちな被災者の交流に役立っていると評価できる。

【コンポーネント②】

- 会場設営は渋谷駅に近いというアクセス、通りに面し、またガラス張りで道行く人が気軽に立ち寄れる場所が選ばれ、来場者にとっては利便性が高かった。被災地外では震災が忘れ去られていく状況の中で、震災の記憶を改めて呼び起こすというニーズに合っていた。

(b) 有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

- 6, 7, 8月と1ヶ月に各1日（計3回）、10月に計2回、一日あたり5ステージをこなし、観客動員数が3600人以上である。対象者は幼児から高齢者までで、その発達段階に応じた音楽プログラムを用意し、楽しませることの工夫がなされ、目的は達成できている。

【コンポーネント②】

- 来場者延べ数230名は、会場のキャパシティから考えると非常に盛況だった判断できる。J-WAVEでの告知などが効果的だったと思われる。
- 動画、写真パネル、コンサート、来場者の意見が書けるホワイトスペースなど、細部にわたり工夫がなされており、活動の成果が報告できていたと思われる。
- 防災意識の啓発という目的は、若干無理があるように感じた。被災地でのコンサート自体が災害や被災内容に触れないで実施するコンセプトであり、渋谷会場で事業においては、被災地の災害前の写真集の展示と販売があったが、防災意識を高めるところまで至っていなかったように感じる。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

【コンポーネント①】

- 生演奏のクラシック音楽を体験することの感動は大きく、参加者の満足度は高い。初めての体験という被災者が多く、聴視者参加型のプログラムも「楽しかった」「また来てほしい」という声が多く寄せられていた。子どもたちのコラージュお手紙なども寄せられ、被災者との交流ができていた。
- 1日3回のコンサートが、1日5回に増えたことは、ニーズの高さがあったからということだが、演奏者の健康や1回のコンサートのゆとりを考えると、やや無理な稼働であったのではないかと危惧する。自発的活動だからこなせたのであろうが、被災者との交流時間の短さや演奏者への心身のストレスを考えると、検討すべき課題と思われる。

【コンポーネント②】

- 来場者の反応は非常に良く、アンコールの拍手が出るという大変熱気のあるものであった。会場が小さいことで、演奏者を間近に感じることができるというメリットが効を奏したという印象であった。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

【コンポーネント①】

- 直接、スタッフが現地を訪問し、日程、会場、参加者などのコーディネートをおこなっているため、顔の見えるコンサートが実施できている。
- 終了のタイミングについて冬季に入る前に活動を終了したのは、交通アクセスの面で正しかったと判断する。

【コンポーネント②】

- 会場に募金箱を設置したことは、来場者に募金をすることを自然に促し、被災地に直接行って支援しなくても様々な支援の形があることを提示しており、被災地コミュニティ（宮城県）への支援とつながることができたといえる。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

【コンポーネント①】

- 音楽の持つ共通性が、幼児から高齢者までそれぞれの世代間でも交流ができていた。「ふるさと」という曲は、若い世代には耳慣れないものだが、今回の震災で演奏することで失ったふるさとの原型を思い起こし心理的な復興の後押しになったと考える。

【コンポーネント②】

- 来場者の中には、自分自身の問題や課題を抱えた方もおり、音楽を聴くことでとても勇気づけられたというコメントがホワイトパネルに書かれており、副次的な効果も発生していた。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

【コンポーネント①】

- 楽器の仕組みの説明（弦楽器の弓が何にできているか、直接弓を目の前ではずして参加者に見せる）を行うなど、通常のコンサートでは体験できない工夫がなされている。
- 鈴や拍手などで演奏する、歌を歌うなど参加者が演奏者とコラボレーションしており、参加者が一方的に聴かされるという形でないところが、受動的になりがちな被災者の心理的状況に自己効力感を与えることができたと評価できる。

【コンポーネント②】

- ▶ 被災地での活動は、どうしても被災地に限定されがちで、ドナーや一般の方々にその活動内容が伝わりにくい面がある。活動報告を、目に見え、体感できる形で実施した点は評価できる。

3. 評価者の所感

コンサートでは、MCを含めて演奏者もいっさい被災状況や喪失体験に触れずに、敢えてクラシック音楽の提供し、楽しんでもらうというコンセプトが良かったと思われる。「頑張れコンサート」的なものの良さもあるだろうが、多くは一度限りのふれあいの中でのものであり、受け手の状況が理解できていない。その点では、被災者個々の被害や心情まで深く踏み込まない形で活動が行われたのは、安全性の意味でも安心できる活動だったといえる。

来場者の中の意見で55回の演奏会に感動していたコメントが寄せられていたが、1日5回の演奏会は、移動や被災地スタッフとの交流の時間、演奏者の体力や集中力を考えるとやや無理があった感がある。多くの被災者に演奏を届けたかったという理念は理解できるが、健康上の安全や気持ちの余裕も必要であるため、今後検討すべき課題と考える。クラシック音楽そのものを提供する本来の意味を考えながら、自分たちの活動のあり方を再度考えて頂くことを期待する。